

# 琉球大学学術リポジトリ

## 総まとめと提言

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター 公開日: 2012-02-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/23011">http://hdl.handle.net/20.500.12000/23011</a>

# Summary and Recommendation

## 総まとめと提言



# 国際島嶼ワークショップ 総まとめと提言

アジア太平洋島嶼研究センター

## 1. 事業名

本事業は、アジア太平洋島嶼研究センターの平成 17 年度中期目標実現事業「国際島嶼ワークショップ」として実施した。内容は二つの柱からなる。

- ①世界島嶼会議沖縄プレ会議：平成 17 年度中期目標実現経費（重点化経費）
- ②やしの実大学：笹川太平洋島嶼国基金の業務委託費（外部資金）

## 2. 招待者

〈琉大招待〉

- グラント・マッコール（国際島嶼学会会長）
- ランディ・ターマン（南太平洋大学教授）
- ロバート・ナカソネ（東西文化センター・沖縄プログラムディレクター）

〈基金招待〉

- トロイ・マクグレース（マーシャルアイランド大学学長）
- パトリック・テレイ（パラオコミュニティ大学学長）
- ヒロミアノ・デロス・サントス（グアムコミュニティ大学学長）
- アンソニー・デ・レオン・グエレロ（北マリアナ大学学長）
- スペンシン・ジェイムス（FSM・ミクロネシア大学学長）
- ハロルド L・アレン（グアム大学学長）
- ヘレン J.D・ウィピー（グアム大学上級副学長）
- ブルース・ベスト（グアム大学研究員）

## 3. プログラム

第 1 日目：2005 年 9 月 1 日（木）

◇9:00～11:30：専門家会議（場所：琉球大学研究者交流施設・50 周年記念館）

1. 開会のことば（進行役：梅村 哲夫 法文学部助教授）
2. 学長の歓迎挨拶（森田 孟進 琉球大学学長）
3. 琉球大学の概要と島嶼地域の交流（嘉数 啓 琉球大学副学長）
4. 琉球大学における研究の特徴（土屋 誠 COE リーダー&理学部教授）
5. 環境教育について（鶴野 公郎 慶応大学政策・メディア研究科教授）
6. 総合討論（コーディネーター：嘉数 啓 副学長）

◇ 14:00～17:00：公開シンポジウム（場所：琉球新報本社多目的ホール）

コーディネーター：嘉数 啓 琉球大学副学長

1. 開会の挨拶（坂名城泰山 琉球新報編集委員）
2. 歓迎の挨拶（三木 健 琉球新報社副社長）
3. パネルディスカッション

テーマ：「島嶼社会のグローバルなネットワークと連携協力に向けて  
—島はインターナショナル—」

<パネリスト>

- グラント・マッコール（国際島嶼学会会長）
- トロイ・マクグレース（マーシャルアイランド大学学長）
- パトリック・テレイ（パラオコミュニティ大学学長）
- ブルース・ベスト（グアム大学研究員）
- ヘレン J.D. ウィピー（グアム大学上級副学長）
- ロバート・ナカソネ（ハワイ東西文化センター・ディレクター）
- ランディ・ターマン（南太平洋大学教授）

第2日目：2005年9月2日（金）（宮古島）

◇ 14:00～18:00：公開シンポジウム（場所：ホテルアトールエメラルド2F）

1. 開会のことば（総合司会：大城 肇 アジア太平洋島嶼研究センター長）
2. 歓迎の挨拶（伊志嶺 亮 平良市長）
3. 共催者挨拶（河野 善彦 笹川太平洋島嶼国基金部長）
4. やしの実大学学長挨拶（窪田 新一 笹川太平洋島嶼国基金室長代読）
5. 基調講演

グラント・マッコール（国際島嶼学会会長）

演 題：「観光における生物多様性とシマンチュの暮らし」

6. パネルディスカッション

コーディネーター：嘉数 啓（琉球大学副学長）

テーマ：「生物多様性とシマンチュの暮らし」

<パネリスト>

- アンソニー・デ・レオン・グエレロ（北マリアナ大学学長）
- スペンシン・ジェイムス（FSM・ミクロネシア大学学長）
- ハロルド L. アレン（グアム大学学長）
- ヒロミニアノ・デロス・サントス（グアムコミュニティ大学学長）
- ロバート・ナカソネ（東西文化センター・ディレクター）
- ランディ・ターマン（南太平洋大学教授）
- 伊志嶺 亮（平良市長）
- 石 垣 博 孝（石垣市史編集委員）
- 前 里 和 洋（沖縄県立宮古農林高等学校教諭）

7. 閉会の挨拶

久貝 勝盛（平良市教育委員会教育長）

第3日目：2005年9月3日（土）（宮古島）

◇ 9:30～15:30：宮古島エクスカージョン（やしの実大学）

#### 4. 会議の概要

##### 〈専門家会議〉

- ・島嶼が抱える共通問題は、互恵的パートナーシップで継続的な取り組みを行い、そのための具体的なプログラムが必要である。
- ・太平洋の各大学との具体的な交流として学生の相互交流を進めること、琉大の観光科学科へ送る学生を研修をしてもらいたい。
- ・遠隔教育を連携して進め、教育ネットワークの改革につながる協力体制づくりに向けた取り組みが必要である。

##### 〈那覇での公開シンポジウム〉

- ・島は文明の中心部から離れた「辺境」に位置するが、同時に新しい文明を生み出す「フロンティア」でもある。
- ・ミクロネシアの島々は離れすぎているため、常に衛星を利用して教育環境を改善する努力をしてきた。教育の充実には人材も資金も不足している。
- ・フロンティア的要素をもちながら孤立している島嶼地域の課題を解決する上で、日本の経験がモデルとなる。技術・技能の提供や留学生の受入など、援助よりも日本が戦後から今日に至った経験を島嶼国・地域に教えてほしい。また、島嶼地域は経済発展とともにいかに自然環境を保全するかという課題を背負っている。
- ・グローバル化が進展する時代に人口の小さい島嶼が生き残るには、海外とのネットワークが必要である。
- ・パラオは沖縄や日本と深い関係があり、協力体制を結びやすい背景があるので、是非連携したい。今回はパラオの学生を連れてきたいし、琉大の学生もパラオに来てほしい。学生の交流は重要だ。太平洋島嶼地域のネットワークの中で共通しているのは、海洋生物や環境保全に関する課題があり、今後、琉大との連携で引き続き追求していきたい。
- ・緊密な関係にある日本からは学ぶものが多く、連携していくことは不可欠だ。他大学と連携して持続可能な開発を見つけ出すための地域の研究を進めていかなければならない。
- ・島国である太平洋地域の人々は、信頼関係のネットワークを緊密にすることが重要である。太平洋地域全体の人々に教育を受ける機会を与えようと取り組んでいる。他大学との単位互換、編入生に対する仕組み作りをしていきたい。
- ・小さい島国に住んでいることは、大きな成果を残すための障害にはならない。海は私たちを隔てるものではなく、結びつけるものである。今回の会議が教育面では遠隔教育などの成果につながることを期待したい。私たちの将来は若い人たちに懸かっている。若い人たちのために、大学間の交換学生の促進をめざしたい。最後に、蓄えてきた知恵・知識を共有することが大切である。

#### 〈宮古での公開シンポジウム〉

- ・シマンチュはお互いのコミュニケーションや通信によってネットワークを作ってきた。インターネットは、広い海に囲まれて隔離されたような地域において知識や情報を共有する一つの方法だ。ニソロジー（島嶼学）はネットワークであり、みんなの協力体制によって発展していく。知識・知恵はみんなで共有することによって力を発揮する。
- ・島のマイナス面としては種の存続の危機に瀕する動物がいるなど環境問題が挙げられる。われわれは子々孫々に残せるものを残していかなければいけない。ともに集うときは物事の始まり、集い続けるときは進展がある。ともに働くときそこには成功がある。
- ・島の資源と海洋資源の利用を持続的に可能にしないといけない。多様性と応用性が重なってこそ持続可能な発展が可能である。今、島嶼は世界から関心の目を向けられている。
- ・グローバル化が進展する時代に人口の少ない小島嶼が生き残るためには海外とのネットワーク構築は不可欠である。
- ・島の生態系を考えると、かなり変化に弱い一面をもっている。島の生態系を守るには努力が必要である。島々の社会生活を守るためには、別の島々の人たちとの情報交換が重要になってくる。教育機関として住んでいる人にとって何が必要であるかを考え、大学同士でネットワークを構築していくことが大切。地域間の協力体制が必要になってくる。
- ・祭りや行事が行われていることが人間が住んでいることの証左である。八重山の民謡の中には、自分の集落の身近な手の届く範囲で食料を調達していることが歌われているものがあったり、自然を擬人化したものもある。最近では自然の動植物にふれる機会が少なくなったので、これからは自然を謳う歌は生まれてこないと思う。島の自然を大切にしていきたい。
- ・地下水を守ることは持続的に発展する上で不可欠。島の周りを海に囲まれた島嶼地域では、毎日、たくさんのもが移入されてくる。島から移出する量は少ないので、残ったものは島に大きな負荷をかけてしまう。将来、持続的な発展を遂げるためには負荷をかけるものを循環していくことが大きな課題である。
- ・平良市のまちづくりのメインテーマは健康である。健康都市づくりとして人、まち、自然の健康を考えている。課題もたくさんあり、自立的経済の確立、自然環境との共生、循環型社会に向け残された課題もあるので、地下水を保全し、しっかりと取り組みたい。廃棄物処理も大きな問題であり、将来的にはゼロエミッションにも取り組んでいきたい。島の共通課題の解決には、島嶼のネットワーク構築が非常に大切である。

#### 5. 参加者からの提言

##### 〈ミクロネシア地域の教育指導者からの提言〉

###### 1. 琉球大学との交流事業

対象：学生、高校生、教師、学科、専門家

内容：環境（水問題）、文化・言語教育、Agriculture, Mari & Aquaculture, ソーラーパワー、風力、観光等

方法：共同事業、資格が取得出来る遠隔教育、滞在費を受け入れ校が相互に負担する制度（現在の協定では授業料が免除になっているが、滞在費の負担が大きく留学をあきらめる学生がいるため）

\*宮古農林高等学校で行われている水教育や宮古島の水対策に全員が高い関心を持った。  
担当教員の前里和洋氏をミクロネシアに招聘したい。

## 2. 協力体制の枠組に関する件

現在締結されている琉球大学と個々の大学協定だけでなく、ミクロネシアの6つの高等教育機関と琉球大の「地域協定」を締結したい。ミクロネシアの6つの教育機関がメンバーとなっている Pacific Distance Learning Alliance の正会員としてもしくは準会員として琉球大学に新たに参加してほしい。

提案者

Dr Helen J. D. Whippy

Dr Patrick Tellei

Dr Troy McGrath

Dr Anthony De Leon Guerrero

Dr Harold Allen

Dr Herominiano Delos Santos

Dr Spensin James

Ms Christina Higa

〈学内＝土屋教授からの提案〉

今回の海外の皆さんの意見は、1) 島嶼を学際的な研究の場としてとらえる、2) 若者の教育を重要視する、3) 今後の活動に対しては日本に資金拠出を期待する、4) ITを利用した活動と、顔を合わせて行う活動を併用する、などが共通点であったと認識しています。

専門家会議では、1) 毎年どこかで共同研究を行い、それに院生、学生が参加する、2) 最後にまとめのシンポジウムを開催する、と提案しましたが、内容が具体的でなかったので早急に議論して具体的な提案をするのがよいと感じました。大太平洋島嶼研究センターが主体となるのであればお手伝いさせていただきます。問題はテーマをどのように絞るか、またそれに参加する研究者と学生が本学に十分存在するかどうかでしょう。

〈学内＝大城の提案〉

やしの実大学のあり方について、今回、ミクロネシア地域の学長先生方から貴重なご提案がありました。また、土屋誠教授からも研究面からご提案がありました。私見では、やしの実大学の趣旨から判断すると、島嶼地域の一般市民の交流の場、学生の交流の場、研究者の交流の場を設けて、相互理解のための事業を展開する必要がある、特に高校生や大学生など若い世代の交流事業が中心となるように思えます。来年度以降のやしの実大学のあり方について、今回の会議での議論や先生方の提言を受けて、以下のようにまとめます。

### ①学生（高校生を含む）の相互交流事業

- ・対象：沖縄県内および奄美群島内の高校生、大学生約5名
- ・課題応募：島嶼地域や太平洋地域についての意識がどの程度か、をみる。
- ・経費のうち3～5万円を自己負担とし、残余を笹川太平洋島嶼国基金の助成とする。（費用負担の意識を持たせ、自発性・内発性を期待）。
- ・ミクロネシア地域からは、各大学から1人をメドとする。費用は全額笹川太平洋島嶼国基

金の助成とする。

- ・環境（水問題）、文化・言語教育、農業、海洋開発、ソーラーパワー、風力、観光、島人の暮らし等をテーマとする。

②一般市民のためのやしの実大学講座事業

- ・八重山、宮古、沖縄本島周辺、奄美、台湾島嶼（澎湖縣）から一般市民を募集して、公開講座の実施と巡検を行い、参加者の交流を図る。
- ・①の学生交流と連携して行う。

③ミクロネシアの6つの高等教育機関と琉球大学の「地域協定」締結に向けた検討事業

- ・ミクロネシア地域の教育指導者から提言のあった地域協定の締結に向けた検討を行う。
- ・現在締結されている本学と個々の大学間協定との関係の検討を行う。
- ・可能な限り地域協定を結び、遠隔教育や人材育成研修を積極的に行う。

④共同研究の推進

- ・環境（水問題）、文化・言語教育、農業、海洋開発、ソーラーパワー、風力、観光、島人の暮らし等のテーマについて、ミクロネシア等の太平洋島嶼国・地域と沖縄の比較研究を学際的に行う。
- ・共同研究に必要な資金は外部資金を活用する。
- ・研究成果の発表の機会を作る。

⑤Pacific Distance Learning Alliance への琉球大学の参加の検討

- ・ミクロネシアの6つの教育機関がメンバーとなっている Pacific Distance Learning Alliance の正会員としてもしくは準会員として琉球大学が新たに参加することを検討する。